

この年（明治元年^{がん}一八六八）、会津藩は軍隊の立てなおしを行った。ここで、健次郎は白虎隊にはいつたが、まもなく藩の考えが変わって、十五歳ではまだ体格が小さく、重い鉄砲^{てっぽう}などを、自由にあつかうことができないという理由から、白虎隊員の年齢^{れい}を十六、七歳と改めた^{あらた}ため、健次郎は、白虎隊からはずされてしまった。白虎隊が出陣するとき、それを見送りながら、健次郎は、

「私も、もう一つ年上だったら」と残念がった。後に、飯盛山^{いもりやま}で自害^{じがい}した白虎隊士たちも、日新館で健次郎と机をならべて学んだ人々である。

白虎隊をはずされた健次郎は、学問がよくできたので、ほかの数名とともに、フランス語を勉強するように命令された。会津藩は、フランスと貿易^{ぼうえき}をはじめていたのである。教科書もなく、筆でフランス語を書いて練習した。今まで聞いたこともない外国のことばにも、興味^{きょうみ}をもってぶつかった。しかし、まもな